

Gereth 夫人の誤解と Fleda のためらい — *The Spoils of Poynton* の社会状況

中井 誠一

1

The Spoils of Poynton (1896) は、戯曲 *Guy Domville* (1894) 上演の散々な失敗の後、戯曲を小説化した *The Other House* (1896) を除けば初めての本格的な長編小説であるということもあって、当時の James の心境と陰鬱な作品テーマとの関連性という形でしばしば批評の俎上に載せられている。他の問題作と同様、この小説にも James 的曖昧性の要素が数多く見られ、それゆえの多様な解釈がなされてきた。特に主人公 Fleda Vetch の本質と作品の真のテーマに関しては解釈上の振幅がかなり大きいといえる。この作品が Fleda の感受性を巡る一種の心理小説を形成しているという性質上、彼女の行動とその意図をどのように捉えるかによって自ずと小説のテーマも異ならざるを得ないからである。

James は自ら編纂した著作集 *The New York Edition* の序文で、Fleda についてこのように述べている。

From beginning to end, in *The Spoils of Poynton*, appreciation, even to that of the very whole, lives in Fleda; which is precisely why, as a consequence rather grandly imposed, every one else shows for comparatively stupid; Fleda almost demonically both sees and feels, while the others but feel without seeing. (xiv-xv)¹

そして彼女は鋭い認識力で見、感じる “the Free Spirit” であると言う。実際に読者の前に現れる Fleda は、確かにその形容の通り、ことの顛末を冷静すぎるほど冷静に見通し、ポイントン邸の蒐集品を巡る紛糾の成り行きや、館の跡取り息子 Owen の愛情の変転さえも予期するかのような深い洞察力を秘めた人物に見える。そしてこのような著者自らの説明と、作品内での実際の Fleda の内省的で抑制的な性質、さらに、Owen を愛していると思われるのに彼の結婚の申し出に飛びつくこともしない禁欲的とも見える態度などから、ともすれば Fleda を極めて道徳的な人物として見なす解釈が生まれがちである。代表格の Yvor Winters は *Maule's Curse* の中でこの作品についてこう述べている。

Similarly, one may fairly ask whether Fleda Vetch, of *The Spoils of Poynton*, does not do something similar to what the governess does in *The Turn of the Screw*, though in the case of Fleda, of course, it would be moral hysteria, if such a phrase may be used, rather than madness. Fleda has it in her power to break the

engagement to marry another woman of the man whom she loves and who love her; the rival does not appear to be so much in love with him as with his perquisites—in fact, it is the rival herself who threatens to break if certain demands are not granted within a limited time, and her attitude appears to be one primarily of bad-tempered selfishness. Fleda, notwithstanding, constructs a moral obligation out of this situation. . . . (Winters, 318-19)

そして Fleda の態度は “beyond the margin of the intelligible”(Winters, 320) であると断定している。

これは Fleda の道徳性を強調するかなり極端な解釈で、さすがに反論も受けた。例えば、Oscar Cargill は Fleda の消極性の心理を分析し、“secretly she hopes for the self-defeat of her rival” と指摘した後に、次のように結論づけて彼女を擁護している。

Placed in the idle and pulled every way, as James saw one would be who sought to be impartial in the fierce British contentions over property, or any contention over property, she resorts in her weakness to evasion and prevarication. This dishonesty in a sensitive person James believes is one of the most hideous by-products of the whole system. . . . (Cargill, 236-37)

確かに Fleda に美術品への執着があったのは、13章で自らをポイントン邸の女主人に見立てて空想に耽る様子からも明らかであり、また Owen を求める熱情の存在を否定することも難しいであろう。

こうした修正の後にも Fleda の複雑な性格について様々な解釈が示されてきた。しかし事実上 Owen との別れに繋がる、彼からの結婚の申し出への謎めいた拒絶的態度に対して、Leon Edel でさえもその動機を「道徳性」と「優柔不断」と見ている(Edel, 451)ように、道徳的存在としての Fleda という解釈が現在でも根強いのが実情である。

しかし実は、Fleda は当時彼女が置かれていた立場の女性として典型的な行動をとっていると考えられる。もちろん彼女が標準以上に道徳的な人物であると指摘することできるだろうが、Owen との出来事の背後に道徳的抑制の動機を見るのは誤解といえる。Fleda の態度は少なくとも Mona の権利を正当に認めるほどには道徳的であった。しかしそれは、Fleda があんな「ひどい女」の権利をも公平に扱うからではなく、Mona が「ひどい女」ではないことが分かっている、しかも Gereth 夫人の偏見につけ込むようなことはしないから、というほどの道徳性なのである。

ここで Fleda の拒絶の原因を論じる前に、彼女と対照的な人物として設定されていると考えられてきた Mona について検討してみよう。なぜならば、Fleda の言動は Mona と

いう女性が Owen の正式な婚約者であるという事実には強く掣肘され、それこそが彼女の拒絶の原因と深い関わりを持っていると考えられるからである。

2

James は同じく序文の中で Mona についてこのように描いている。

The will that rides the crisis quite most triumphantly is that of the awful Mona Brigstock, who is *all* will, without the smallest leak of force into taste or tenderness or vision, into any sense of shades or relations or proportions. (xvii)

実際物語中でも、ポイントンの蒐集品にあくまで固執し、それらを巡る紛糾の中で心変わりした Owen を最後には再び自分のものにする Mona は Fleda と対比され、表面的には所有欲の権化として悪の主人公と見られるかもしれない。作家の中村真一郎は、「相手方の息子の嫁の方には、『根元的組織的醜悪』、『美的趣味の原理の無慚な欠落』という悪を割り振っており、ここで物語ははじめから善玉悪玉がはっきりとなっている」と述べて、Mona の「悪」を当然のものとして見なしている。(中村, 198) これは一般の読者にとってだけでなく、大方の研究者にとっても自明のものとなっているといえる。事実 Mona を積極的に擁護する論はほとんど見あたらないのである。

しかし Mona はそれほどに「悪」なる存在なのだろうか。この小説は三人称で書かれているが、いわゆる「三人称限定視点」の技法により、冒頭部分は Gereth 夫人、それ以外はほとんど Fleda の視点に添って描かれている。実際には前半部でしか読者の前に姿を見せない Mona に対する悪評価は、大部分が Gereth 夫人によって形成されていることにもう一度ここで注意を向ける必要がある。

冒頭部分で我々はまず、Mona の実家である Brigstock 家の屋敷ウォーターバスで、その屋敷の家具や装飾の趣味のひどさについて Fleda に不満を漏らしている Gereth 夫人と向かい合うことになる。彼女は自分の趣味の良さを自負していて、このような「根元的組織的醜悪」には耐えられないと考えている。そしてこの屋敷の娘である Mona と自分の息子 Owen が婚約しそうだという予想に慄然とする。

It was her [Mrs. Gereth's] fancied exposure at any rate that had sharpened the shock, made her ask herself with a terrible chill if fate could really be plotting to saddle her with a daughter-in-law brought up in such a place. She had seen Mona in her appropriate setting and had seen Owen, handsome and heavy, dangle beside her. . . . (8)

「こんなところで育った娘を嫁に貰う運命だとは。」こう嘆く時点で夫人の Mona に対する評価はすでに決定してしまっている。この「根源的組織的醜悪」や「趣味の無慚な欠落」は Gereth 夫人にとっては決して許せない汚点であると見なされているからである。

しかし「趣味の無慚な欠落」が罪だとするならば、「イギリスで最も美しいもの」(16) を所有すると自負する Gereth 家に太刀打ちできない、イギリスの多くの家庭の娘に罪があることになる。語り手は、Gereth 夫人のこの傲慢な偏見を次のように述べている。

The great drawback of Mrs Gereth's situation was that, thanks to the rare perfection of Poynton, she was condemned to wince wherever she turned. She had lived for a quarter of a century in such warm closeness with the beautiful that, as she frankly admitted, life had become for her a true fool's paradise. (12)

結局彼女には自分ほどの美的趣味を有しないものはすべて耐え難い存在なのである。しかも夫人の中では Brigstock 家の「趣味の欠落」の問題がいつの間にか Mona 個人の人格に対する非難へと形を変えている。

Mrs Gereth spoke of poor Mona's taint as if to mention it were almost a violation of decency, and a person who had listened without enlightenment would have wondered of what fault the girl had been or had indeed not been guilty. (16)

興味深いことには、この引用の後半部で Fleda に寄り添った語り手は、Mona の罪のなさを暗示するかのような客観的観測を示しているのである。

このような状況の中で、Mona と彼女の母親は Owen と共にポイントン邸を訪れる。Mona に対する Gereth 夫人の偏見と嫌悪感は、同じ美的趣味を共有する Fleda との会話の中でますます凝り固まっていくのだが、この訪問での Mona の態度によってさらに決定的なものとなってしまふ。Mona の態度とは沈黙であった。Fleda のように美術品への鑑識眼を持たない Mona にとって不案内なことには口を出さない方がよいと思えたのかもしれない。これは、分を弁えるという意味では当然の振る舞いである。ところがこれがかえって夫人の不興を買うことになる。逆に Mona の母親の方は饒舌にポイントン邸を褒めそやすのだが、Gereth 夫人にはその褒め方がまた痛に障るのである。いずれにせよ夫人には「趣味の悪い」Brigstock 家自体が気に入らないのであり、それはどんな言動によっても埋め合わされるものではないことが推測されよう。

このポイントン邸訪問以降、Mona は直接的には物語の表舞台に姿を現さない。後は Owen や Brigstock 夫人の報告と Gereth 夫人や Fleda の憶測だけで彼女の描写が積み

重ねられ、その過程の中で **Mona** の虚像はさらに練り上げられていく。この時点で **Gereth** 夫人と自らの視点を重ね合わせてしまった読者は **Mona** を「悪」と見なしてしまうことになる。生涯をかけて美術品を収集した当の **Gereth** 夫人を無情にも追い出し、その主に納まろうとする非道の女だと。しかし元々ポイントンの所有に関しては、言うまでもなく、法的正当性は **Mona** にあることを忘れてはならない。

ここで、この物語が設定されている当時の社会状況を取り上げておくことは有効であろう。というのも、**Gereth** 夫人は「夫に先立たれた母親を抹消してしまうイギリスの慣習を憎んでいた」(49)という叙述に見られるように、この作品にはヴィクトリア朝社会の財産に関する女性の社会的制約が色濃く反映しているからである。**J. P. ブラウン**によると、「19世紀においては、今までのどの時代にもまして、すべての階級が金に基盤をもつようになった」(**J. P. ブラウン**, 20)のだが、そんな中でも、女性の、財産に関する立場は不安定なものであった。19世紀後半までは、「夫婦一体」(unity of personality)の法理に基づき、未婚女性の財産は結婚によってすべて夫の所有物となっていた。それが不合理だとして改革されていくのが、1870年、82年、93年の三回に渡って施行された「既婚女性財産法」(Married Women's Property Acts)である。70年の法律はざる法であったが、改正に従って妻の財産権は確立していく。この作品がアトランティック・マンズリーに書き始められたのが1896年なので、もし書かれた年代通りの状況だとすると、実際にはその時期の妻の財産権は法律上は認められていた。しかし物語の中では、今はなき **Gereth** 氏は自分の所有物であったポイントン邸をすべて息子 **Owen** に譲っている。恐らく財産の名義はすべて彼のものであったと思われるが、問題は、二人で収集した美術品までも妻を飛び越えて長男に相続させるという **Gereth** 氏の態度から垣間見ることができる抜きがいヴィクトリア朝社会の慣習である。**Gereth** 氏にとってそうすることが自然な振る舞いであったと同様、**Owen** や **Mona** にとってもそれを自分たちが相続するのはまったく当然な行為だと思われたであろう。それでも **Owen** は **Gereth** 夫人に譲歩を示しているのだが、「彼に勝利を与えることになる」としてそれを頑なに拒むのは **Gereth** 夫人の方なのである。

She [Mrs. Gereth] was of course fully aware of Own's concession, his willingness to let her take away with her the few things she liked best; but as yet she only declared that to meet him on this ground would be to give him a triumph, to put him impossibly in the right. (50)

それでは、こうした一連の経緯を **Mona** の立場から見るとどのようになるだろうか。事態はまったく逆転して見えるはずである。つまり、**Owen** と婚約をしてもいないうちに実家の趣味が悪いという理由で嫌われ、ポイントン邸の訪問でも冷たくあしらわれ、婚約し

て正当な相続者となろうとする矢先に夫人によって家具や美術品をほとんど持ち去られてしまう。もし Gereth 夫人ではなく Mona の視点から見直せば、当時の状況においてより客観的に思われる構図が現れてくるだろう。Mona が Gereth 夫人に反発を覚えるのは、むしろ当然の成り行きに思える。James は明らかにそれを暗示する言葉を、Fleda の視点に添った語り手によって作品中にさりげなく挿入している。Later Fleda perceived indeed that perhaps almost any girl would hate a person who should be so markedly averse to having anything to do with her. (18)

このように Gereth 夫人と Mona の間の確執と見えるものは、実は一方的に Gereth 夫人からの悪感情によっていることが了解される。さらに事態を一層紛糾させ、複雑にしているのが Fleda の存在なのである。Mona あるいは一般の人から、Fleda はどのように映っているのだろうか。Fleda への同情を廃して中立的に想像してみると、Owen とその婚約者の間に介入して財産をねらういかがわしい女というイメージが浮かぶであろう。それを端的に示しているのが、Brigstock 夫人のこのような主張である。

What she[Mrs. Brigstock] had come for was not to get the old things back, but simply to get Owen. What she wanted was that I would, in simple pity, see fair play. Owen had been awfully bedevilled—she didn't call it that, she called it "misled"; but *it was simply you who had bedevilled him*. He would be all right still if I would only see you well out of the way. (208-9) [イタリック筆者]

「悪魔に取り憑かれている」とはかなり強烈な言葉であるが、Fleda の性格が分かっている Gereth 夫人、そして読者にとっては的はずれな誹謗に思えても、部外者から見ればそう見えてしまうことは確かなのである。しかし、意図的に財産を狙ったわけではないにしても、Fleda の中にポイントンを欲する気持ちがあることは確かなので、Brigstock 家の言い分をすべてばかげていると退けることもできない。Gereth 家とは縁もゆかりもない Fleda が Gereth 夫人に取り入っているばかりか、夫人と Owen との交渉では常に仲介役として現れ、彼と二人きりで長い会話を交わすことすらあるのは、Mona にしてみれば納得のいかない話であろう。単純な Owen はその様子をそのまま Mona に伝えるだけでなく、Fleda を素晴らしい人だと褒め称える。女性が一人で外出することすらまななかつた当時の状況からすれば、Mona が嫉妬に駆られるのも無理はない。蒐集品を返すまで許さないと Mona が頑なに言い張ったのも、Fleda が指摘するように、彼女のことを巡って Mona と Owen の間で喧嘩があったからだと推測できるのである。結局その喧嘩は二人の愛情に基づいた、いわば「痴話喧嘩」なのである。Fleda が繰り返し「Mona は決して Owen を手放しはしない」と述べるのは、財産目当てという側面だけでなく、二人の間の愛情の絆を簡単には疑えないからだと解釈できよう。また、Brigstock 家に関して、ほとんどの研

究者が無視してきた事柄が、前出の引用に示されている。それは、Brigstock 夫人が Gereth 夫人に頼みにリックスまでやって来たのは骨董品ではなく Owen を取り戻すためだということである。所有欲の権化のように評されてきた Mona と Brigstock 夫人であるが、ここでは蒐集品という「もの」よりも、少なくとも表面上は、Mona と Owen の「愛情」を優先させているといえるのである。

3

こうして見てくると、Fleda には、客観的社会的に彼女を支える何らの正当性もないことに改めて気づかされる。それではそのような自分の立場を Fleda は意識していなかったのだろうか。いや、それどころか、鋭敏な Fleda はそれを痛いほど意識しており、むしろ、彼女の言動はすべてその意識によって強い制約を受けているのである。Brigstock 婦人がリックスにやってくる直接的動機となった出来事—Fleda の父親の家での彼女 Owen の「密会」—の現場で、Brigstock 婦人は Fleda に、Owen から手を引いてくれるように頼みに来たことを匂わせるが、その時 Fleda は “As if I were one of those bad women in a play?”(177)と答える。これこそ、Fleda が常に心の片隅に抱く自らの「否定的」イメージなのである。James は一般的な視点から見える Fleda 自身の姿を何度も、しかしほとんど読み飛ばしてしまいそうなさりげない形で物語の中に挿入している。例えば、ポイントン邸に長居をしている Fleda は、ある時妹から彼女についての世間の噂を聞かされる。“Besides, people were saying that she [Fleda] fastened like a leech on other people—people who had houses where something was to be picked up”(60)。

物語全体を通じて、Fleda は世間 (world) を非常に強く意識していることが感じられる。しかし、それも社会背景を考慮すると不思議ではない。L. C. B. シーマンは、「限られた数回の社交期中に夫となるべき人を見つけなければ『売れ残り』となったことに気づくのである」と、当時から上流階級の娘たちがどれほど『夫探し』に懸命になっているかについて述べている。(シーマン, 143) 女性たちは競ってできるだけ自分より身分の高い男性、あるいは金持ちの男性を求めて奔走した。もともと男の数に比べて女の割合が極めて高かった時代だったが、男性もまたできれば自分より身分の高い女性を求めたので、女性の「売れ残り」はさらに膨大な数に上った。Fleda のように身分もなく、財産どころか自分の住む家すらなく、教養以外他に目立つような取り柄のない女性にとっては、彼女自身が指摘するように “The future was dark” (28) でしかない。Fleda のそんな境遇をあからさまに表す言葉をうっかり彼女の前で口にした Owen が大いにあわてる様子が以下の引用には描かれている。

“You don’t—a—live anywhere in particular, do you?” the young man went on. He

[Owen] looked conscious as soon as he had spoken; she could see that he felt himself to have alluded more grossly than he meant to the circumstance of her having, if one were plain about it, no home of her own. He had meant it as an allusion of a highly considerate sort to all she would sacrifice in the case of a quarrel with his mother; but there was indeed no graceful way of touching on that.(98)

しかし Fleda の不安はそれだけに止まらない。実のところ、彼女は自分が fallen woman になってしまうのを恐れているとさえ考えられるのである。オックスフォードストリートで買い物をしていた Fleda と偶然出会った Owen は彼女に針刺しを買ってあげたり、散歩につきあったり、食事に誘ったりする。その時 Fleda はこんな想像を巡らす。

She [Fleda] had read in novels about gentlemen who on the eve of marriage, winding up the past, had surrendered themselves for the occasion to the influence of a former tie; and there was something in Owen's behavior now, something in his very face, that suggested a resemblance to one of those gentlemen. But who and what, in that case, would Fleda herself resemble? (66)

「Fleda 自身は、その場合、誰にそして何に似ているのか」と語り手は問いかけ、敢えて答えを出さないが、言うまでもなく「昔の女」か「妾」、さらには「なじみの娼婦」といったところになるだろう。ヴィクトリア朝時代は、厳格な規範を有する外面とは裏腹に公然と娼婦買いが行われていたダブルスタンダードの社会だったが、中産階級は表面上社会規範を忠実に守ろうとする傾向が強いため、矛盾の度合いはさらに甚だしいものとなった。ヴィクトリア朝研究家の荻野美穂は「相手となる男たちが単数か複数化という違いや金銭の授受という問題以前に、『自らの情欲に負けて徳を失った女はすべて娼婦とみなすことができる』という、きわめて広く漠然とした前提が存在していたらしい」と娼婦の定義の広さを示した上で、中流の女性でも「未婚の娘であれば自分を誘惑した男たちと首尾よく結婚までこぎつけることができなければ、ただちに汚辱のマクダレンへと転落し、下層の女たちと同じ道をたどると考えられていた」と述べている。(荻野, 166-174) 実際こうした転落のパターンは数々の小説や絵画の題材となっている。

このような社会的背景があり、自分がまさにその転落に陥りそうな状況にある Fleda に対して Gereth 夫人は、わざわざ二人きりにさせたのにと、むしろそうした状況を促すかのような口ぶりさえ見せる。豊かな家庭に生まれ育ち、自らの転落など想像したこともないと思われる Gereth 夫人は、Fleda の胸の内や、無一文に近い中産階級の娘が置かれている状況をまったく理解していない。Mona を悪く誤解した時とは逆に、Fleda のためら

いを彼女の道徳のせいだと誤解しているのである。David Lodge は、Fleda が性的神経症であると見る William Bysshe Stein などの研究者たちに対して、“[they] are apt to be judging her in the light of modern sexual mores.”(Lodge, 135) と批判しているが、同じことが社会背景についてもいえそうである。Fleda が人知れず熱望しているものは「正当な婚約者としての権利」なのである。その正当性は、今は Mona の手にあり、Fleda は世間の目から見れば、どうあがいても Owen をたぶらかそうとする「悪女」でしかない。ではなぜ、その Lodge でさえ訝しむように、それほど欲していた正当性を手に入れるために Owen の結婚の申し出をすぐに受け入れなかったのだろうか。それは、Owen と Mona の間の愛情が完全には破綻していないことを Fleda が見抜いていたからである。

この小説のクライマックスというべき Owen の結婚の申し出の場面で、Owen への愛の中にくずおれていきそうになる感情を必死で抑えながら、Fleda は、なぜ Mona と別れないのかと問う。Owen の答えは、その役割を Mona に押しつけてやろうとしているためだ、というものだった。これはつまり、Owen には自分の方から Mona と手を切るつもりはないということである。先に述べたように、Owen と Mona の不和が、自分のことを巡って起こった「痴話喧嘩」に過ぎないことをうすうす察していた Fleda は、Owen の本当の気持ちを確かめなかったのである。さらに、「一度は愛した人と『終わり』にしてしまうことがうれしいのか」という Fleda の問いかけに対して、Owen はこう答える。

He waited long enough to take in the question; then with a serenity startling even to her knowledge of his nature, “I don’t think I can have really loved her, you know,” he pronounced.

She broke into a laugh that gave him a surprise as visible as the emotion it represented. “Then how am I to know you ‘really love—anybody else?’”

“Oh I’ll show you that!”

“I must take it on trust,” the girl pursued. “And what if Mona doesn’t give you up?” she added.

He was baffled but a few seconds; he had thought of everything. “Why, that’s just where you come in.”

“To save you? I see. You mean I must get rid of her for you.” His blankness showed for a little that he felt the chill of her *cold logic*. . . (187-8)

今まで述べてきた文脈から、ここでの Owen の返答を検討すると、彼がいかにか Fleda の状況を理解していないか、いかにすべてを彼女任せにしようとしているかが分かるであろうし、中村が「読者の混乱を増」す(中村, 196) とした Fleda の奇妙な哄笑の意味も理解できるであろう。Fleda は、Owen が Mona への愛情を失ったということを疑っているだ

けでなく、自分への愛の告白さえ怪しいと思っているのである。ここでもし、何の正当性も持たない Fleda が Owen の求めのままに Mona の排除に手を貸せば、「悪女」の烙印は決定的なものになってしまう。しかし最大の問題は、もし Owen がその後再び Mona の下へ戻ったとすると、Fleda の「転落」も決定的なものになるということである。こうした状況から最終的に Fleda は、まだ Owen は “valid right” (196) を与えてはくれないと判断し、申し出を時期尚早だと考えたのだ。Gereth 夫人が唆すような大胆な誘いは Fleda にとっては危険すぎる賭なのである。

しかし、実はここで Fleda はあることを思いつかず、絶好の機会を逃してしまうことになる。それは Owen の申し出を断った後に妹のところ居候をしている Fleda の下を訪れた Gereth 夫人が、ほとんど冗談のように喋った話によって明らかになる。これはまた研究者たちがほとんど無視してきたか軽視してきた件である。Gereth 夫人は、Fleda と Owen の付き合いに発展がないことにいらいらして、「自分だったら Fleda を結婚登記所 (registrar) に引っ張っていくのに」と漏らす。この時 Fleda はその言葉に激しく反応する。

This stirring speech affected our young lady as if it had been the shake of a tambourine borne toward her from a gipsy dance: her head seemed to go round and she felt a sudden passion her feet. The thrill, however, was but meagerly expressed in the flatness with which she heard herself presently say: “I’ll go to the Registrar now.” (220-1)

冷静沈着な彼女が、共に連れ立っていくべき Owen がその場にはいないにも拘わらず、思わず「今から登記所に行きます」と口にしてしまうところに、その動揺の大きさが示されている。そう、〈正当な権利〉を求める手っ取り早い解決策は、その場で Owen を伴って登記所に行ってしまうことだったのだ。しかし、Fleda にはそんな「妙案」は思いもよらなかった。そのことは、彼女がいかにヴィクトリア朝の社会通念に強く縛られていたかを示している。当時いやしくも淑女たるものが教会で結婚式を挙げもせず、登記所で事務手続きを済ませてしまうなどということは、不名誉極まりないことだったからである。それは Fleda 自身の “What do people say of that? I mean the ‘world.’”(241) という言葉に端的に示されている。しかし、皮肉なことに、その間に現実的で行動力に富んだ Mona は Owen を登記所に連れて行き、さっさと結婚手続きを行ってしまうのである。David Lodge はこの件の Fleda の言動を “her sudden change of mind”(138)と見なしているが、彼自身「現代の」社会習慣から Fleda の心理を判断してしまっているといえよう。彼女の意図は物語全体を通底しているのである。

こうして **Fleda** は、ヴィクトリア朝的規範にしばられたまま、人生最大の機会を失ってしまう。すべてを「悪魔的に見通す」彼女の自由精神にも社会通念の壁に阻まれて見えないものがあつたのである。このように **Fleda** には一貫して「正当な権利」を求める動機が潜んでおり、**Owen** の結婚の申し出に対するためらいも、それが彼の方からしか与えられないと思ひ込んでいたからである。それは、**Fleda** が過度に道徳的だったからではなく、当時の社会通年に縛られていたために登記所に駆け込むという究極的な方法を思いつかなかつたからに他ならない。**Gereth** 夫人も、そして彼女と視点を同化した読者も、そんな **Fleda** に表面的な道徳性を見てしまうことになる。

中産階級の女性が当時置かれていた状況を描いた物語は多数あり、一時隆盛をみた「ガヴァネス小説」はその典型といえる。しかし、それらは大抵、サッカレーの『虚栄の市』やヘンリー・ウッド婦人 (1814-87) の一連のベストセラーもののように、風俗小説的に外面的な展開を追っただけのものだった。この作品で **James** は、**Fleda Vetch** という貧しい中産階級の娘を、不遇な境遇にありながらも鋭い認識力を備えた人物として設定し、彼女の密かな心理的葛藤を通じて矛盾に満ちたヴィクトリア朝の社会規範を見えない圧力として描き出している。自らも中産階級内部の人間としてその矛盾を外面的に追求するイギリス作家たちとは違い、彼らが見逃すような微妙な状況を登場人物の内面から描き出すところにアメリカ作家としての **James** の技量が示されているのである。

[注]

- 1 *The Spils of Poynton* からの引用はすべて *The New York Edition*, 24 vols により、以後かつこ内に、Prefice はローマ数字、本文はアラビア数字で記す。

参考文献

- Armstrong, Paul B. *The Phenomenology of Henry James*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1983.
- Bell, Millicent. “James, the Audience of the Nineties, and *The Spoils of Poynton*.” *The Henry James Review* 20 (1999): 217-26.
- Cargill, Oscar. *The Novels of Henry James*. New York: The Macmillan Company, 1961.
- Edel, Leon. *Henry James: A Life*. New York: Harper & Row, Publishers, 1985.

- Geismar, Maxwell. *Henry James and his Cult*. London: Chatto & Windus, 1964.
- Greene, Philip L. "Point of View in *The Spoils of Poynton*." *Nineteenth Century Fiction* 21(1967): 359-68.
- James, Henry. *Henry James Letters Vol. III 1883-1895*. Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press, 1980.
- . *The Complete Notebooks of Henry James*. Ed. by Leon Edel and Lyall H. Powers. New York: Oxford University Press, 1987.
- . Vol. X of *The Novels and Tales of Henry James*. Charles Scribner's Sons, 1908. Fairfield, New Jersey: Augustus M. Kelly Publishers, 1976.
- Lee, Brian. *The Novels of Henry James: A Study of Culture and Consciousness*. New York: St. Martin's Press, 1978.
- Lodge, David. *After Bakhtin: Essays on Fiction and Criticism*. London and New York: Routledge, 1990.
- Matthiessen, F. O. *Henry James: The Major Phase*. London: Oxford University Press, 1946.
- Otten, Thomas J. "The Spoils of Poynton and the Properties of Touch." *American Literature* 71 (1999): 263-90.
- Putt, S. Gorley. *Henry James: A Reader's Guide*. Ithaca, New York: Cornell University Press, 1966.
- Rowe, John Carlos. *The Theoretical Dimensions of Henry James*. The University of Wisconsin Press, 1984.
- Sarris, Fotios. "Fetishism in *The Spoils of Poynton*." *Nineteenth Century Literature* 51(1996): 53-83.
- Smith, Virginia Llewellyn. *Henry James and the Real Thing: A Modern Reader's Guide*. New York: St. Martin's Press, 1994.
- Stein, William Bysshe. "The method at the Heart of Madness: *The Spoils of Poynton*," *Modern Fiction Studies* 14 (1968): 187-202.
- Stuart, Christopher. "The Spoils of Poynton: 'What can you call it . . . if it ain't really saved?'" *The Henry James Review* 19 (1998): 166-82.
- Williams, Merle A. *Henry James and the Philosophical Novel: Being and Seeing*. Cambridge University Press, 1993.
- Winters, Yvor. *In Defence of Reason: Maule's Curse*. The Swallow Press, 1947.
- Young, G. M. *Portrait of an Age: Victorian England*. 1936. Oxford and New York: Oxford University Press, 1986.
- シーマン, L. C. B., 『ヴィクトリア朝時代のロンドン』 社本時子・三ツ星堅三訳, 創元社, 1992年。

田中英夫編、『英米法辞典』東京大学出版会，1991年。

中村真一郎、『小説家ヘンリー・ジェイムズ』，集英社，1991年。

荻野美穂，「『落ちた女たち』—虚像と実像」『英国文化の世紀4：民衆の文化誌』松村昌家・川本
静子・長島伸一・村岡健次編，研究社，1996年。

ブラウン，J. P.，『19世紀イギリスの小説の社会事情』松村昌家訳，英宝社，1987年。

リーダー，W. J.，『英国生活物語』小林司・山田博久訳，晶文社，1994年